

## 第1部会

エリアーデのレジオナル運動とのかかわりは、その精神的な側面において従来のエリアーデの主張を、理想として体現あるいは実現させると思われた点が、親レジオナル的立場を示した理由として挙げられる。後に、近代批判を伴う西洋近代人の救済という問題と深く関わる理論展開を行なっていることを考えると、いかなる社会への意識を有していたのかという点は、重要である。また亡命後の、政治的な言論への沈黙がいかなる意味を持つのか、良く知られた普遍性を志向する後の彼の宗教学と民族主義的活動は断絶しているのか、それとも形を変えて継承されているのかについても、検討されねばならないだろう。エリアーデの思想形成上の諸問題を、このような視点でとらえなおすことにより、エリアーデが固執した人間の宗教性への積極的評価や、宗教学に課した文化的・社会的役割の問題に、新たな光を投ずることが出来るはずである。

## 往復書簡集からみるI・P・クリアーノと

## M・エリアーデの関係

佐々木 啓

I. P. Culiannu (クリアーノ) のルーマニア語による全集の中に一書として収められた Mircea Eliade (エリアーデ) との往復書簡集 *Dialoguri intrerupte: Correspondența Mircea Eliade — Ioan Petru Culiannu* (『中断された対話…ミルチア・エリア

ードーヨアン・ペトル・クリアーノ往復書簡』(Tasi: Polrom, 2004) を読み解くことによって、自他共に認める緊密な師弟関係で結ばれていた Eliade と Culiannu との間に見られる、他ならぬ「宗教学」の方法論にかかわる微妙な(ある意味では明白な)差異が明らかとなる。

Culiannu は Eliade 宛ての手紙に次のように書いた。「私は、『Mircea Eliade と新しい人類学 “Mircea Eliade et la nouvelle anthropologie”』という論文を一〇月一日までに仕上げると約束したのです。…「新しい人類学」というのは、私にとつては、フランス人が理解するようなものではまったくありません。(それは)むしろ、Kuhn や Feysabend の認識論から生み出された新しい人類学の方向であり、それは先生を大いに再評価することになるでしょう」(p. 272, 手紙 No. 105)。しかし、この往復書簡集の序文を書いた Matei Calinescu ならずとも、「Thomas Kuhn (『共約不可能である』科学的パラダイムの理論家) と(著作『方法のかなたへ』で Kuhn をより過激にし、認識論的「アナーキズム」の基礎を築こうと試みている) Paul Feyerabend とならぶ位置づけが、どれほど Eliade を喜ばすことになるのかは、わからない」(p. 34) というのは誰でもいさぐ疑問であろう。

他方、Eliade は Culiannu 宛てのある手紙で次のように書いていた。「一部の学者達が、われわれの(そして彼ら…)分野を「科学」に変換することを望みながらも、まさしく作り上げてしまった「モデル」、そういった「モデル」に対するあなたの嫌気は、私も理解でき、共感できるものです。…結局、何

故、自然科学的、または社会科学的な「モデル」に倣わなければならぬのでしょうか？ 最終的に、解釈学こそが最も可能性を秘めた「アプローチ」であると思います。つまり考察対象とするスピリチュアルな文献の「意味」や「メッセージ」を解説することに努めるのです。確かにこの作業は完結することがなく、われわれ各人が到達する結果は、「最終的・決定的」なものではありません。しかしこれは、二〇世紀の終わりにおけるあらゆる文化―特に二〇世紀の終わりにおけるわれわれの文化―の条件であり、宿命でもあると思います」(p. 171, No. 59)。これは、いわば「本質主義的」に「宗教」の探究を行なうことを主唱する、Eliadeの一貫した態度の表明である。

ドイツの宗教史学者 Kurt Rudolph は、Eliade の宗教研究を批判して、Eliade 自身が自分の立場を history of religions と称しているにもかかわらず、それは真の意味での Religionsgeschichte (宗教史) ではないと論じている。究極的には、Eliade と Culiannu は、その方法論上の方向性が厳密に一致するとは思えないにもかかわらず、この Rudolph などからは、彼らは同類に見えていたに違いない。

しかし、むしろ、最終的に Culiannu が主張したような宗教研究の立場を Eliade が認めたかどうかは微妙であろう。Rudolph などの批判がどうであれ、Eliade が history of religions すなわち history (histoire?) に固執したのに対して、Culiannu は言葉の真正な意味で science of religion (「宗教を科学する」、さらには「宗教が／も科学である」) を目指していたと言えるのではないか。そして、この点で Culiannu が、何ら

かの仕方で行き過ぎていたのだとしても、そこには、「宗教学」なる学問の一つの本質が、むしろあらわな形で示されているのではないだろうか。

## 亡命者エリアーデの思想における「宗教」

奥山 史亮

本稿は、ミルチア・エリアーデの非還元主義的宗教概念を、エリアーデの亡命ルーマニア人としての活動の中に再定位することを目的とする。今日の宗教学において、政治的、経済的要因に還元不可能な「宗教」を提示するエリアーデの方法論は厳しい批判を受けている。これらの批判に対して私は、エリアーデの非還元主義的宗教概念はこれまで注目されることのなかった亡命ルーマニア人組織におけるエリアーデの言論活動と重ねあわせることによって、初めてその意義が明らかとなると考える。本稿では、特に、エリアーデが宗教の還元不可能性を論じる際に用いたスピリット (spirit) という概念が、一九九二年にブカレストで出版された『絶望に抗して』(Impotrița deznađejdei, Humanitas, 1992) に収録されている亡命ルーマニア人組織の機関誌に掲載されたエリアーデの原稿において、如何なる文化的役割を担っているのかを明らかにする。

エリアーデは一九四五年にパリへ亡命した後、亡命ルーマニア人組織の設立を経済的に支援していたラデスク将軍 (Rade-